

至近過去を表す副詞の形成

山口 堯 二

〔抄録〕

古代語では完了の助動詞による「ありつる」などの形で発話時にごく近い過去の事柄に言及することができた。過去と完了の助動詞が「た」に統合された近代語では、助動詞側のそのような役割は失われた。そのため、中世にはより分析的にそのような時点を表せる言い方が要請され、室町期にはいくつかの至近過去を表す、時の副詞が形成された。和語では「さき」「さきほど」がそれであり、近世には「さつき」も現れた。「さきほど」や「さつき」は、至近過去専用の語になって現代に至る。漢語「さいぜん(最前)」「せんごく(先刻)」も室町期以降、至近過去を表すの

に用いられるようになった。現在を表す「いま」「ただいま」に発話時直前を表す用法が増えるのも、室町期以降である。近世後期以降にはその「いま」を核に成立した「いましがた」や、「いまいんま」で至近過去の至近性を強調する「いまさつき」などの言い方も現れ、さらに多様化している。

キーワード 「さつき」、「最前」、「先刻」、「いましがた」、

至近過去

一 はじめに

過去と完了の助動詞が分かれていた古代語では、発話時現在にごく近い過去の時点に起こった事柄の表現には、完了の助動詞が関係する

ことが多かった。発話時現在にごく近い過去の時点を表す言い方には、完了の助動詞「つ」が、動作動詞やそれに代用される「あり」などと共起する形でよく用いられた。たとえば次に一斑を示すような言い方も、後世なら時の副詞などが用いられそうな、発話時にごく近い過去

の時点の表示を助動詞「つ」が兼ねていると見ることが出来る。

(1) かぐや姫の心ゆきはて、ありつる歌の返し、

まことかと聞きて見れば言の葉を飾る玉の枝にぞありける
（竹取）

・「雨もやいたく降りはべると思へば、神の鳴りつる音になむ、出でてまうで来つる」（蜻蛉・中・天禄二年六月）

・げによに思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君をもどかしと見つる子どもみなうちしほれたり。（源氏・夕顔）

古代語では自然的变化の終了するムードを示すには「ぬ」が用いられ、助動詞「つ」は意志的な動作の完結するムードを分担していた。

「ぬ」が担った自然的变化の終了は、発話時現在まで続く新しい事態の発生にもつながりやすいから、「ぬ」のほうは発話時現在と区別してそれにごく近い過去の時点を示すことには、なじまなかつたであろう。

しかし、古代語で使い分けられた完了の助動詞「ぬ」「つ」「たり」「り」は、過去の助動詞「き」「けり」とともに、近代語への過程で「た」の一語に収斂し、統合された。その統合の進行については、別に探りを入れたことがある。その統合の結果、近代語の助動詞「た」は、完了と過去の表示を併せて担うことになったので、古代語の助動詞が個々に持ちえた働きに比べると、「た」の表示力は完了と過去のいずれについても著しく後退した。発話時にごく近い過去の時点の表示を兼ねていた助動詞「つ」の働きも、その統合に向かう変化の過程で消滅したと見てよい。

助動詞史におけるそのような変化は、近代語ではより分析的にそれを表現する、副詞や補助動詞の新しい動きによって補完されたと考えられる。補助動詞によるその補完と分析化については、「てのくゝてのける」「てしまふ」などの働きを中心に、すでに検討を試みた。本稿は、古代語の助動詞「つ」が兼ねていた発話時現在にごく近い過去の時点の表示が、すでに述べた「た」への統合とそれに伴う表示力の後退後、新しい時の副詞の出現によって、いかに補完されたかという関心を起点として、室町期以降に出現する至近過去を表す時の副詞の類の形成について検討を試みるものである。

二 「やち」「やちせ入」「ちせぬ」

「さき」は「あと」や「のち」の対義語であり、本来相対的な先後関係を表す語として、時については過去を示すこともできた語である。中世室町期になると、その「さき」にごく近い過去を表す例が次第に増える。それは副助詞「ほど」を伴う「さきほど」の形で用いられ、発話時現在から見ておよそ数十分程度前を中心とするかと思われる、ごく近い過去を、「さき」だけの形よりもより明示する言い方として、一足早く定着したようである。近世には「さき」に促音の介入する「さつき（さつき）」の語形も現れた。中世室町期になつてそのようにごく近い過去を指す副詞が出現するのは、すでに述べた助動詞の統合による旧来の完了の助動詞の表示力の後退を補完する動きと見ることが出来る。ここでは、それらの語が表す発話時現在から見たごく近い過去を、至近過去と呼ぶことにする。

時の副詞は一般に名詞性と副詞性を兼ね備えることが多い。至近過去を表す「さき」も、格助詞を伴う「さきに」「さきより」「さきの」などの形で連用成分・連体成分になるほか、やがて「さき」だけで副詞になる性質も併せて持つようになる。格助詞を伴う例は、すでに中世室町期から、次のように通時的変化を反映しやすい会話文や心中思惟の表現に認められるが、「さき」だけで副詞に用いられた例の出現は近世後期のことようである。

(2) 文正申しけるは、「常岡娘一人もちて候。さきに給はり候ものを、妹うらやみ申し候。これにも給はり候へ」と(御伽草子・文正さうし)

・その後、御前を下向して、五六町行きて思ひけるは、さもあれさきの小男は誠に神にてましますか。(室町物語・弁慶物語)

・さらばいはふて、さきのさゝをください。(虎明本狂言・比丘貞)

・ヲ、さればくさきよりさは思ひしかども、張物にしかくりて遅

なはり参らせしと、(浄瑠璃・堀川波鼓・上)

・「七ツを打て、よほど過るに、さきからおこすが、とかく埒があ

かん」(洒落本・遊子方言)

・ひさしぶりでもねへ。先刻五十間で、見かけたぜ。(洒落本・廓字久為寿)

室町期にはすでに例(2)のような至近過去をさす「さき」の例が多数派になっているが、次に示す例(3)のように共起する数詞との関係や、例(4)のように対応する時点との関係次第で、発話時現在からもつと隔たる過去をさすこともあった。その意味で、「さき」は時間的な意義

だけに限定しても、室町期をはじめとする早い時期にはまだ至近過去のみ表す語になり切っているわけではなかった。

(3) 十日ばかりさきに山へ参つてござるが、帰て其まゝ煩付いてござる。(虎明本狂言・梟山伏)

・二三百年がそのさきに、葦原国より、男三人来りしを、をさへて斬りて、島人のまばりにし給へば、(御伽草子・御曹司島渡)

(4) さきこそ約束違へめ、さのみはいかで人の命をそむき給ふぞ。

(御伽草子・文正さうし)

・さても人間は、わが依怙ばかりを本にして、さきの忠節をばうち忘れて、当座の奉公ばかりを本とすることの嘆かしさよ。(エソ

ポ物語・四八五〜六頁)

例(4)の第一例は、今回の妻の女兒出産に対し、前回出産の折りも、夫の希望に反して女兒を産んだことをいう。

室町期以降、この至近過去をさす「さき」は副助詞「ほど」を伴う「さきほど」の形でも用いられている。室町期の「さきほど」の例はまだ多くないようだが、すでに至近過去のみ用いられているから、この形のほうが「さき」よりも至近過去の意を明示できる言い方として、一足早く定着したようである。

(5) 「さることのあり、余りの寂しさに、さきほど昼の頃、この船に乗り、自らこの若を連れて、慰みて候より、その外は何の不審もあるまじく候」……「何とてかやうにさきほどより、我を不審させ給ひ候ぞや。心得難く候。……」(室町物語・あきみち)

・師聞曰、「諸々業軽き人哉」と也。後に一僧、師に問、「先程の者

は、実に業軽き者なりや」。(仏教・反故集・下)

・母は律儀一遍に、「先程はお使、また御自身のお出で、御尤く。

……」(浄瑠璃・冥途の飛脚・上)

・丞相は先程お立ち、誰を迎ひに、心得ぬ事ながら此方へ通じませ
い、(浄瑠璃・菅原伝授手習鑑・二)

・先程も菱屋のおあらの所から、お文が参つて居ますヨ (人情本・

英対暖語・四・一九)

・余り先刻みな様のお強ひ遊ばすが五月蠅さに、一人庭へと逃げま
して、お稻荷さまのお社の所で酔ひを覚まして居りましたに、

(樋口一葉・われから・九)

促音の介入した「さつき」が現れるのは、近世になってである。そのころからこの語形が、すでに述べた「さきほど」と並んで至近過去を表す最も一般的な語になったようである。その「さつき」も、それだけで副詞に用いられる例が認められるのは、近世後期のことのようにある。後にはすでに取り上げた「さきほど」や後述する「せんごく」の漢字表記でその意義を示しながら、「さつき」とルビを振る表記の例も見かけるので、それらを含めて次に例の一斑を示す。

(6) さつきのやうに申せしは、わたしが心有つての事。(浄瑠璃・大

経師昔暦・上)

・さつきにもいふ通り、ちつとした領解違ひで物思はせた。(浄瑠

璃・心中宵庚申・下)

・さつきにから呼ぶ声が、きさまの耳へははひらぬか。(浄瑠璃・

仮名手本忠臣蔵・五)

・さつき内を出る時、すこしばらついたゆへ、からかさはなし、夫
で是を。(歌舞伎・東海道四谷怪談・序幕)

・ナニ、モウ少し先刻来ましたけれども余まり一心になつてお在な
さるから、夫で無言で居ましたのサ。(人情本・春告鳥・五・廿

八)

・「叔母さんは。」先程お嬢様と何処らへか。」(二葉亭四迷・浮雲・

一・一一)

三 「最前」「先刻」

「さき」「さきほど」「さつき」は語種としては和語であるが、それらと並んで室町期から至近過去を表しはじめた語には、漢語(字音語)もある。「さいぜん(最前)」と「せんごく(先刻)」がそれである。

「さいぜん」の至近過去を表す用法は、口頭語として早く一般化したらしく、『虎明本狂言集』では、至近過去を表す場合、「さき」に比べて、「さいぜん」のほうがはるかに多用されている。次に至近過去を表す「さいぜん」の例の一斑を示す。

(7) 是の人は、さいぜんおひちをこしらへひとひ付られたが、何を

していさしますやら、今にわせぬ。(虎明本狂言・路連)

・申く、さいぜんの鬘を河へ流しまして御さる。(狂言記・二・

二・こんくわい)

・さ程私がいやならば、さいぜんからよけずとも、なぜ此の馬に踏

み殺させて下さんせぬ。(浄瑠璃・鐘の権三重帷子・上)

・さいざんおしひ所をとりがして、これまであとをおわへてきた。
こゝであふたが百年め。(浄瑠璃・近頃川原達引・下)

・最前聞いたる屋鋪替えの趣、花水橋の向う、かつしか郡へ引移る
と有り。(歌舞伎・東海道四谷怪談・序幕)

この「さいぜん(最前)」は、より古くから「最後」などと対になる語として、次の例にうかがえるように、「最初」とか「真つ先」というほどの意に用いられた語であった。

(8) 二心なく祈申けるに、神感ありて、はからざるに上総守に成にけり。任国の最前の得分をもて、千部の経をはじめてけり。(古今著聞集・一・七)

・当国の住人に久下弥三郎時重と言ふ者、二百五十騎にて最前に馳せ参る。……「さてはこれが最初に参つたるこそ、当家の吉例なれ」とて、(土井本太平記・九)

・雖「小臣身」、最前一騎馳上事可謂「当千」。(文正記)

「さいぜん」の「さい(最)」に含まれる強調性を、もし時間的な先行度の意に解すれば、「さいぜん」は発話時現在とはむしろ隔たる過去を表すことにもなりかねないはずである。しかし、そうはならず、至近過去の表示に用いられたのは、すでに述べた「さき」との類義性に支えられたのであろう。「最初に」などの、他に先行する意や先行する時点の意は、和語「さき」にもあつてその用例は多い。至近過去を表す「さいぜん」の用法は、和語「さき」とのそのような意義的共通性において、「さいぜん」がその類義語と見なされたことによるであらう。

その至近過去を表す用法においては、「さい(最)」はむしろ最近というほどの意でむしろ感覚的にのみ解されたのかもしれない。ともかく、いち早く至近過去を表す用法が口頭語で一般化し、副詞として用いられた「さいぜん」は、和語「さき」以上に至近過去を明示できる語と見込まれた可能性がある。

次に「せんごく(先刻)」について述べる。まず、その例の一斑を示す。

(9) せんごく書状以て申入れ候。(捷解新語・十)

・家康公御覽被成、「鳥毛の半月は先刻此陣下を敵に向候き。高名仕候哉。誰が者」と御尋候。(武辺咄聞書・一七八)

・今日は正七つ時と、先刻から申し渡したでないか。(浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・三)

・(源左) コレおとみ、なんだえ手前は、平馬さまへ御挨拶もしねえのか。(平馬) アイヤ／＼先刻奥でちよつと逢ひ申した。(歌舞伎・与話情浮名横櫛・三幕目)

・私は、つい先刻、私に声をかけた男の船に自然に視線を戻していた。(曾野綾子・地を潤すもの・4・一)

右の第五例は、副詞「つい」によつて、その表す至近過去の至近性が強調されている。至近過去を表す副詞の至近性を強調する言い方については、種々後述するが、これもその一つのありようとして注意してよい。

ちなみに、「せんごく」には対義語として「ごごく(後刻)」がある。「ごごく」も同様に至近の未来をさすと見てよいだろう。

「せんごく」の「ごく(刻)」は、言うまでもなく時間や時刻を表す単位であるが、それにはいくつかの意義が区別できる。そこで、まず「せんごく」の「ごく」が、語源的にどのような意に基づくかを、その語の現れはじめた中世室町期から近世初期にかけての、「ごく」の用例の分布をもとに推測してみよう。「ごく(刻)」には、次のようないくつかの意義がある。

もと漏刻の箭が示す刻み目の目盛りを示すもの。一昼夜を等分する定時法と、季節による昼夜の長さの違いに応じて、変動しながら昼と夜とをそれぞれ六等分する不定時法の各々で、「子の刻」「午の刻」など十二支の名をつけて示す法、「辰四刻」「卯二刻一分」のように、十二支の後ろに一―四をつけて示す法、「寅上刻」のように十二支の後ろに、上・中・下をつけて示す法などさまざまの表し方があり、この語自体は助数詞のように用いるのが普通。(角川古語大辞典)

右の説明に例示されている一番目の「子の刻」式の「ごく」は、定時法では現行時法の二時間に相当する。昼夜がそれぞれ六等分された不定時法では、二十四節気の別に測られたので、季節別に差が生じるが、それも二時間前後と見てよい。二番目の「辰四刻」式の「ごく」は右の四等分の一、三番目の「寅上刻」式の「ごく」は同じく三分の一に当たり、ともに「子の刻」式の「ごく」をさらに細分する呼称である。

一番目の「子の刻」式の「ごく」は古くから「とき(時)」とも呼ばれ、その十二支の代わりに、昼夜別の時報に用いられた鐘などの数

による、「九つ」「八つ」などの呼び方もあった。「子の刻」式の「ごく(刻)」と、それに相当する「とき(時)」、および、鐘などの数を表す数詞による呼称については、『ロドリゲス日本大文典』にも次のようにある。

自然の日、即ち昼と夜とは十二の時刻に分割される。昼が六つ、夜が六つに分けられ、その時刻を(Cocu(刻)、又は、toqui(時)と呼ぶ。昼は太陽の出る時に当るVnacocu(卯の刻)、又は、Mutqudogui(六つ時)に初まり、同じ太陽の沈む時を以て終る。さて、「せんごく」については、『邦訳日葡辞書』に次のようにある。Xencocu. センコク(先刻)。Mayeno togi.(前の刻)。過ぎた時、または、今より少し前。

ここで「せんごく」は、「Mayeno togi」と、言い換えられているから、その「ごく」は、二時間前後に相当する「子の刻」式の「ごく」と見られていることになる。

「せんごく」の「ごく」は、時刻のもとになる時間の長さにも用いられる。それには、連体成分をうけてその状態にある時間を言ったり、数詞などと複合して時間の長さを言ったりする、次のような用法がある。

- (10)辰刻より午刻迄取合ひ、数刻の矢軍に手負余多出来、無人になり引退所にて、(信長公記・首)
- ・折ふし宿の主他行の刻なれば、かりてつかひ居たる金柄の小刀を内の方に嚙にわたす。(漸本・醒睡笑・六・推はちがうた)
 - ・祭りの刻限は何時でござる。何と巳午の刻じゃ。ゑい、身どもは

一刻も二刻も早ふ出た。とてもものことに、九条の古御所を見物して帰らふ。(続狂言記・二・見物左衛門)

これらの「こく」は、いずれも過去の事実の叙述に用いられている点で、「せんこく」の「こく」に似ている。その文脈から察するに、いずれも「子の刻」式の「こく」に当たる長さに用いられていると理解して問題はなさそうである。

右の第一例の「数刻」については、『邦訳日葡辞書』に次のようにあつて、その「こく」が現代時法の二時間前後に当たることが、さらに確認できる。

Succu. スコク(数刻) Cazuno toqi.(数の刻) 多くの時。

この「多くの時」という語釈に、訳者は次のような注も添えている。

原文はhoras. horaを日本の「ひと時」にあてて用いる。

なお、例(10)の第三例にもある「一刻」は、次のように広義の未来における希望などと共起することもある。その場合、より短い時間の意にとれそうになるが、それは希望表現との共起に支えられてのことであるから、それを当時の「こく」一般の意義とすることはできない。広義における過去の事実の叙述に用いられる「せんこく」の「こく」を理解する傍証にすべきではない。

(11)討死ノ事其隠ナク候間、一刻モ早ク北国へ働キ、父ガトムラヒ合

戦仕、都近ク取続キ、公方ノ御目ニカ、リ、先祖ノ名字ヲフマエ

申度候。(謙信家記)

よつて、「せんこく」の「こく」は、二時間前後をさす「子の刻」式の「こく」の意に基づくと思つてよいと思う。

「せんこく」については、「せん(先)」の意も一樣ではない。「先日」「先年」などの場合は、あまり遠くない過去のある日や、ある年をさし、直前の日や年は意味しない。しかし、「先月」の場合は直前の月をさして用いられる。つまり、「せん(先)」には、少し離れた過去の時点をさすこともあれば、ごく近い過去の時点をさすこともあると理解できる。思うに、「先日」「先年」が少し離れた過去の日や年をさすのは、直前の日や年には、「きのふ」「さくじつ」「こぞ」「昨年」などの、より一般的な言い方がすでに定着していることに関係しているだろう。「先月」にも類義語「昨日」があるが、「昨日」のほうがより特殊であろう。

さて、「せんこく」には、その語以外に直前の「こく」をさすことを妨げるような語はない。それどころか、もし直前の「こく」を除く、より離れた過去のある時刻をさすとすれば、より明示的な時刻名や、「朝方」「昼ごろ」など、その成立を妨げそうな別の言い方の存在がむしろ考えやすくなる。よつて、「せんこく」の「せん」は、発話時現在から見てその直前の「こく」をさすと見るのが自然である。

以上の考察の結果、発話時が午の刻とすれば、直前の巳の刻をさすというように、発話時から見たその直前の二時間単位の刻が「せんこく」の原義ということになる。そう理解して「せんこく」と呼びうる時間帯が発話時現在からどれだけ遡れるものかを考えてみると、もし午の刻の終わり方に「せんこく」といえば、理屈上は、巳の刻のはじめまでをさせることになるだろう。その計算でいけば、発話時現在から遡つて最長四時間を越えない程度の至近過去をさすのが「せんこ

く」の原義と考えてよいことになる。それが室町期や近世初期の「く（刻）」の用例と、『邦訳日葡辞書』の説明に基づく、「せんこく」のいわば語源的意義である。

「せんこく」は、室町期における早い例の入手しにくさから見て、すでに言及した「さきほど」や「最前」のほうが少し先行した可能性があるが、「さきほど」「さつき」「最前」などには、特にその時間帯の範囲を決める手がかかりが見当たらないので、それらのさす時間帯の理解にも、右の推定を及ぼして差し支えないだろう。それらの類義語のさす時間帯が個々に違うというような、複雑な語彙体系はかえって想定しにくいからである。室町期に現れる、至近過去を表すと見てきた語の類は、「せんこく」の語源的意義の解釈を傍証として、本来、発話時現在から遡り、最長四時間を越えない程度の時間帯に用いられたと推定できることになる。なお、この「発話時現在から遡り」という時間帯の最終時点については、後に「いま」の類の用法との分担性から、少し修正する必要があるけれども、その点については後に譲る。

四 「いましがた」とその周辺

室町期以降は、基本的に現在を表す「いま（今）」の用法にも少し変化が生じている。現在と呼ばれる時間は、過去と未来から区別される、相対的にごく僅かな時間に過ぎないが、たんなる瞬間や刹那とは違って、われわれの意識においてそれなりの時間的な幅が与えられている。そこで、「いま」という語は、発話時現在だけでなく、それはさんで発話時の直前や直後に焦点を当てても用いられる。「いま

の周辺には副詞「ただ」でそれを限定する「ただいま」や、「ただ」から転じた「たつた」による「たつたいま」という言い方もある。「いま」という語にそれらの言い方が成り立つのは、その現在と呼ばれる時間の幅が過去や未来に比べて、きわめて限られていることによるだろう。それらにも発話時の直前や直後に焦点を当てて用いられる用法が「いま」と同様にあるから、それらも「いま」の類に属する言い方と見てよい。

しかし、完了の意を明示できる助動詞によって、結果的に発話時直前を表すことも容易であった古代語では、「いま」や「ただいま」で発話時の直前に焦点を当てる言い方をする必要はほとんどなかったらしく、古代語ではその例が入手しにくい。それらに発話時の直前を表す用法がめだてくるのは、そのような表示性を完了の助動詞に依存しにくくなった中世、特に室町期以降である。

次に、室町期以降の「いま」「ただいま」、および、近世中期ごろからに現れる「たつたいま」の用法について、発話時直前を表すと見うる例と、直後を表すと見うる例を、それぞれまとめて示す。

(1) 今ゆた髪が、はらりととけた、いか様心も、たそにとけた。（閑吟集・二七四）

・ 太郎くわじや、いまの物をだせ。（虎明本狂言・岡太夫）

・ いや是はいかな事、只今某が田へいるゝ水を、はや何者やら参て、ならばの田へ入ておいたは。いや言語道断の事じや。（虎明本狂言・水掛簀）

・ たつた今誓文立て、ことに銀も手放したり。まづこちらをしまふ

てのけふか。(浄瑠璃・心中重井筒・上)

・「たつた今出た許りで、十分になるか、ならないかで御座います」(夏目漱石・こゝろ・上・四)

(13) いま、たゞ今、立ち並び給ひなむと言ふく、(源氏・空蟬)

・「さあらば、たゞ今生ませて見せ申べき」とて、(仮名草子・竹斎・下)

・「たつた今間男を引きずりだして見せふぞと、(浄瑠璃・心中重井筒・上)

「いま」の類には室町期以降、例(12)のように発話時直前を表す用法が俄に頻繁になるのであるが、それはやはり完了に関する助動詞側の機能の後退を補完する現象と見てよい。

しかし、「いま」「ただいま」「たつたいま」が表せる発話時直前は、同じ言い方で表せる発話時の直後と相対する時点であるから、それらの表示性はなお文脈への依存性の高いものである。それらの語形、ないし、連語形には、現代語に至るまで、発話時直前に専用されるような通時的変化は認められない。それに対して、先述の至近過去を表す副詞は、遅くともその形成後間もなく、いずれも至近過去に専用されるようになった。その意味で、「いま」の類の発話時直前を表す用法は、先述の語の類による至近過去の表示と、直ちに同一視すべきものではない。「いま」の類による発話時直前の表示と先述した語の類による至近過去の表示とは、時間帯の違いからも、非専用の・専用のの違いからも、区別して理解すべきである。

さて、基本的に現在を表す「いま」の類の用法に、こうして室町期

以降、発話時直前を表す用法が頻繁化することを思えば、先述の副詞

類が表す至近過去という時間帯についての説明も、それに沿って調整の必要が生じる。副詞類の表す至近過去と、「いま」の類の表せる発話時直前とは、物理的には連続するものの、話者の意識においては区別されると見なければならぬからである。たとえば、次の例でも、

「さいぜん(最前)」「せんごく(先刻)」「さつき」は「いま(今)」「ただいま(只今)」とは明らかに区別して使用されている。

(14) さいぜんは御参詣、今は御下向、慎みなし。討つて捨つると刀の柄に手をかくる。(浄瑠璃・女殺油地獄・上)

・先刻口上に仰こされし通り、やうく只今支度致いた。(浄瑠璃・新うすゆき物語・中)

・今そこへ来た女は、さつきのあんまじやアねへかの。(滑稽本・東海道中膝栗毛・八上)

「せんごく(先刻)」の語源的意義の解釈を傍証として、至近過去を表す副詞の類は本来、発話時現在から遡つて最長四時間を越えない程度の時間帯に用いられたと推定した。しかし、「いま」の類の表せる発話時直前との分担性を考えれば、「発話時現在から遡つて」という説明では、その時間帯の最終時点が「いま」の類で表せる発話時直前と重なってしまう。同じ時の副詞性をもつ語同士の分担体制として、そういうどつちつかずのありようは認めがたい。よって、その「発話時現在から遡つて」という部分は、「いま」の類で表せる発話時直前の時間帯を除いて」と改めなければならない。言い直せば、先述の至近過去を表す副詞の類は、「いま」の類で表せる発話時直前の時間帯

を除いて、本来、最長四時間を越えない程度の時間帯に用いられたと推定できることになる。

ところで、基本的に現在を表す副詞である「いま」からも、それを核として至近過去を表すと見てよい語が形成された。近世後期以降に認められる、次のような「いまがた」「いましがた」がそれである。

(15) 客「いやほんにもふ何時じやある、かぎり打たか」大「今がた打まして御ざります。いつそ御ろくに御休み遊ばさんか。(洒落本・郭中奇譚へ異本)

・「うん、今方戻って来た。婆やんのとこへ行ちよつたと。」(上林 暁・ちちはのはの記)

(16) お壁さん、今し方表を通つたおかみさんを御覧か。(滑稽本・浮世風呂・三下)

・今し方いゝ塩梅に、雲切れがして止みさうだつたが、又強く降つて来たな。(歌舞伎・三人吉三廓初買・五幕目)

・あの、先刻（いま）若い者を御迎へに差上げまして（いま）います。(徳富蘆花・不如帰・上・一の二)

・「いつ見えたのです」「ほんの今しがた」(芝木好子・面影・二)

・「いまがた」「いましがた」は、「いま」や、「いま」を副助詞「し」で強める言い方に、時間的な方向や位置を表す意味で、接尾語「がた」を付けることにより、「いま」で表せる時間帯よりも前の、「いま」に近い時間帯を限定する言い方と見てよかろう。

「いま」を副助詞「し」で強める言い方には、古く次のようなものがある。

(17) 木の暗（くま）の繁き尾の上をほととぎす鳴きて越ゆなり今しへ伊麻之（いま）来らしも (万葉・二十・四三〇五)

・「いまし、はねといふところにきぬ。(土佐・一月二日)」
それがずっと継続したかは判然としないが、近世にも次のような例がある。

(18) 今し円さんがをまへのうちへはいりなんしたによつて、八重のさんのいゝなんすにはツイいくからよそへいきなんせんようにしてをくれなんせと、(洒落本・傾城仙家壺)

「いまがた」「いましがた」は、このような「いまし」を含めて、すでに述べた「いま」の類における、発話時直前を表す用法の類繁化と、至近過去を表す既存の語の類の存在を前提とし、その至近過去の時間帯のうち、「いま」の類で表せる発話時直前に近い時間帯をおさえて、その至近性を強調する言い方と解せる。発話時直前に近い時間帯であるから、「いま」が用いられたのだが、その目的は既存の語の類の表す至近過去の、至近性の強調にあつたと見るのである。そうであれば、基本的に現在を表し、発話時の直前や直後にまたがる幅をもつ「いま」や、それを「し」で強めた「いまし」に、時間的な方向や位置を表す「がた」は付け得ないはずだと考えるのである。

「いまがた」「いましがた」の先後関係はつきりしないが、例(15)の第一例は、『洒落本大成』第四巻の解説では、明和八年頃の刊と推定されており、それによれば、現在知られる「いましがた」の初例である例(16)の第一例よりかなり早い。しかし、より一般化したのは、こ
のうちの「いましがた」のほうであつた。

なお、次の例は「いましがた」の「いま」の代わりに「只今」が用いられた珍しい例のようである。しかし、今のところ他にそうした例は見当たらない。

(19) (長九) 時にちいさん、何時だの。(茶屋) ハイ只今しがた浅

草の六ツがなりました斗りござります。(歌舞伎・与話情浮名横櫛・序幕)

至近過去を表す言い方には、すでに取り上げた至近過去を表す副詞「さき」や「さつき」を「いま√いんま」で強調する言い方もある。

それには次に示すように、格助詞「の」を伴う連体的な「いまの√いんまの」の形で強調する言い方と、「の」を伴わず、副詞として直ちに「さき」や「さつき」を限定する言い方とがある。

(20) そふいへばなるほど、今のさき船のあがり湯で、ハテ見たよふな所だとおもひやしたが、(滑稽本・東海道中膝栗毛・六上)

・わしやそのばんとうが心安うて、いんまのさきこゝへ見へて、そのはなししてじやつたが、(滑稽本・東海道中膝栗毛・八下)

(21) いんま先、ごで升。大かたへんじに来て、升じやある。(洒落本・興斗月)

・額をかくす冠の、黒い色が著るしく目についたのは今先の事であったに、(夏目漱石・虞美人草・十四)

(22) 今さつき手に触れて、こんな冷たい髪の毛は初めてだとびっくりしたのは、(川端康成・雪国)

発話時現在を表すためでも、その直前を表すためでもなく、至近過去の至近性を「いま√いんま」で強調するそのねらいは、副詞「さ

き」や「さつき」との一体化によつて「いまがた」「いましがた」以上に明白であるが、その言い方が時期的に「いまがた」や「いましがた」の出現しはじめる近世後期から認められることも、「いまがた」「いましがた」を至近過去の至近性を強調する言い方と解する私見の傍証とすることができる。

至近過去の至近性を強調する言い方は、「いまがた」「いましがた」に、「いまのさき√いんまのさき」「いまさき√いんまさき」「いまさつき」を加えて、近世後期以降、多様化してきているのである。

先に室町期から近世初期にかけての「せんこく(先刻)」の解釈と、「いま」の類で表せる発話時直前についての理解から、至近過去を表す副詞類の適用できる時間帯は、「いま」の類で表せる発話時直前を除いて、本来、最長四時間を越えない程度と推定した。しかし、近世後期以降、見てきたように至近過去を表す副詞には、その至近性を強調する言い方も多様化している。個人で時計を所持し、時間に追われる慌ただしい生活が普通になってきた現代人にとつての至近過去が室町期などと同じであろうはずはない。至近過去を表す副詞の至近度は、時代とともにその程度を高めてきたはずであり、近世後期以降、至近過去の副詞にその至近性を強調する言い方が現れ、多様化してきたのも、それを反映する動きにほかならないであろう。

一八六七(慶応三)年刊の『和英語林集成』初版には、次のように「先刻」の語釈に、まず数分以前の意をあげている。発話時直前を除いて最長四時間と推定した室町期のそのの至近度に比べると、この数分以前という至近度は格段に高くなっているのである。

SENKOKU. センコク、先刻、*n*, A few minutes ago, a short time before. Syn. SAKIHODO, SENDATTE.

五 結び

古代語には過去の助動詞とは別に、完了を表す助動詞「ぬ」「つ」があり、発話時の直前や、それにごく近い過去の時点の表示は、動作動詞やそれに代用される「あり」などと共起する「ありつる」「見つれば」などの形で「つ」が分担していた。しかし、過去と完了の助動詞が「た」に統合される近代語では、かつての「つ」が担ったそのような助動詞の表示力は後退する。その通時的変化を補完するために、より分析的に発話時の直前や至近過去を表せる語の類の出現が中世には要請された。それが室町期になって、至近過去を表すいくつかの語がにわかに見れる大きな理由である。

至近過去を表す語としては、まず、時間的により広義の過去や「最初」などの意に用いられていた「さき」に、発話時現在から見た至近過去を表す例が次第に増える。その中で、「さきほど」が至近過去をより明示する言い方として、一足早く安定に向かった。近世には「さき」に促音の介入した「さつき」も現れ、これも至近過去に専用される語になった。

漢語にも、室町期から至近過去を表す副詞が現れる。「さいぜん(最前)」と「せんごく(先刻)」がそれである。「さいぜん(最前)」は、より古くから「最初」「真つ先」の意に用いられた語であったが、室町期以降の口頭語では、至近過去を表す語になった。

基本的に現在を表す「いま」や「ただいま」にも、文脈に依存しながら、発話時直前を表す用法が室町期になって頻繁化する。それも至近過去を表す副詞の類の出現と同じ理由による。近世中期ごろから現れる「たつたいま」についても同様である。しかし、それらは発話時直前に専用される語ではない点で、至近過去を表す副詞の類の一つには括れないものであり、発話時現在以前の比較的近い時間帯を、至近過去を表す副詞の類との間で分担していることになる。

近世後期以降には、「いまがた」「いましがた」も至近過去を表す副詞の一つになる。そのうち、後者が特に一般化した。これらはその至近過去の時間帯のうち、「いま」の類で表せる発話時直前に近い時間帯をおさえることによって、至近過去の至近性を強調する言い方である。その出現するところからは、「いま√いんま」で「さき」や「さつき」を限定する、「いまのさき√いんまのさき」「いまさき√いんまさき」「いまさつき」なども加わり、至近過去の至近性を強調する言い方も多様化してきた。

至近過去を表す副詞の類で表せる至近過去の時間帯は、室町期の「せんごく」などに手がかりを求めれば、「いま」の類で表せる発話時直前を除いて、本来、最長四時間を越えない程度の過去と見る事ができた。しかし、近世後期以降、至近過去の至近性を強調する言い方が現れ、多様化してきていることは、至近過去を表す副詞の至近度自体が、時代とともにその程度を高めてきたことを反映する動きとみてよからう。

〔注〕

(1) 山口堯二「完了辞・過去辞の通時的統合——たへの収斂——」
『日本語文法体系と方法』一九九七（平成九）年、ひつじ書房、山
口堯二「助動詞史を探索」二〇〇三（平成十五）年、和泉書院、第
十一章）。

(2) 山口堯二「完了辞の統合にかかわる補助動詞の関与」（『助動詞史を
探る』第十二章）。

(3) いわゆる時の副詞については、川端善明「時の副詞——述語の層に
ついて その一——（上下）」、『国語国文』三三・一一、一二、一九
六四（昭和三九）・一一、一二に、汎時論的に文論レベルの位置づ
けをめざした論がある。本稿の対象とした副詞の代表的な語につい
ても、その周辺との関係などについての言及がある。

(4) 橋本万平『日本の時刻制度』（一九六六（昭和四一）年、塙書房）。

(5) 『時代別国語大辞典室町時代編』（一九八五（昭和六〇）年）二〇〇
一（平成一三）年、三省堂）の「こく・剋」の項には、この部
分を「自然界の一日」と訳して引いており、わかりやすい。

(6) 小林賢章『アカツキの研究 平安人の時間』（二〇〇三（平成一
五）年、和泉書院）第四章には、「カタ」は「時刻を表わす語につく
ときは、その始まり部分を意味する」とあって、次のような言及があ
る。

イマシガタの場合も、話している時点より前をさして、ついさつ
きの意味では使用されるが、現時点より後をさしては使用できな
いことから、イマシガタも少なくともイマシという短い時間の前
の方をさすことはわかる。

この「イマシという短い時間の前の方をさす」という見方には従え
ないが、小林氏によれば、中古のアカツキガタは「アカツキの開始部
分をさす語」であるが、アカツキの開始時点より前に当たる、「午前
三時前をアカツキガタと言っている」、「アカツキチカクと同じ意味」
の例もあることが指摘されている。「いでしたがた」の「がた」はその
後者に相当するというのが私見である。

(7) 「いんま先、ごで升」の「ご」は午。夜半を知らせる太鼓を打った
ことをいう。なお、この洒落本『興斗月』には、天保七年の自序があ
る。

（やまぐち ぎょうじ 日本語日本文学科）

二〇〇三年十月十五日受理

